

それでは、先週に引き続きまして、聖書 66 巻のキリストについて見ていきたいと思ひます。聖書の中心テーマはイエス・キリストであるということは、大分時間をかけて皆さんにお伝えしてきましたけれども、勿論この点は強調し過ぎることはありませんので、今日これからもこのことを何度となく繰り返し繰り返し皆さんにリマインドしていきたいと思ひます。

『聖書の主要教理』という本があります。アメリカのテキサス州のダラス神学校の創立者で、ルイス・スペリー・シェイファーという人が書いた本で、『聖書の主要教理』という本があります。この本は全員クリスチャンであれば、読んで欲しい本のひとつなんですけれども、主要教理が非常にコンパクトにまとめられているものです。これは難しい本ではなくて、大抵私たちが聖書を学ぶ上で必要な主要な教理をカバーしているものなので、教会にも置いてありますので、是非目を通してもらいたい本のひとつです。その中にこのように書いてあります。「主イエス・キリストこそは、聖書の最高の主題である。しかし、聖書を読んでいくと、キリストの人格と働きの完全性は、様々な面から描かれていることが分かる。」シェイファーは4つ、キリストのその人格と働きというものを挙げております。

第1に創造主としてのイエス・キリスト。

第2に世界の最高支配者としてのイエス・キリスト。

第3に受肉したことばとしてのイエス・キリスト。

第4に救い主としてのイエス・キリスト。

このように4つに分けて説明をしておりますが、今私たちはこれらを聖書 66 巻の中から大まかに見ているわけですが、イエス・キリストこそが聖書の主要なテーマであるということです。

もう一つすべてのクリスチャンにお薦めしたい本ですけれども『新聖書ハンドブック』という本があります。ヘンリー・H・ハーレーという人の書いた本で、そこに「キリストは聖書の中心、いのちである。」という項目がありまして、そこを少し抜粋して読ませて頂きます。

「聖書の中心であり、いのちであるキリスト。歴史の中心でありいのちであるキリストは、私たちの生活の中心、いのちでもある。私たちの永遠の運命はキリストの手に握られている。この方を私たちの主、私たちの救い主として、受け入れるか、受け入れないかによって、永遠の栄光に入れられるか、永遠の滅びに入れられるかが決まる。私たちは天国か、地獄のいずれかに行くことになる。すべての人に求められている最も重大な決断は、心の内でキリストを受け入れるか、受け入れないかをハッキリと決めることである。すべてはそこに掛かっている。そして、聖書の全体はこのキリストについての美しい物語と、キリストを受け入れる者に永遠のいのちが与えられるという約束を中心として構成されている。聖書が書かれたのは、ただ人々がキリストを信じ、理解し、知り、愛し、キリストに従うようになるためである。」誰もが異口同音に、“聖書の中心はイエス・キリストである”ということを述べていますので、私たちもここは外さないように、聖書のどこを開いても、イエス・キリストが現れてくるというのが、聖書という書物であります。

そして、これは聖書を教える者としての言葉ですが、マルティン・ルターはこう言っています。「もし、あなたが適切に安全に解釈しようとするなら、あなたと共にキリストを受けよ。なぜなら、キリストはすべての者が関与しているお方であるからである。」と。聖書を分かち合う時に、教える時に、必ずイエス・キリストを絡めて、イエス・キリストをそこに含めて語らなければ、それは神聖な正しい教えとはならないということで、必ずイエス・キリストをそこに関与させるように。イエス・キリスト抜きのお話

というのは、正しいとは限りません。最も安全な聖書解釈は、イエス・キリストを鍵として理解するというものであります。そして、正しい教えはイエス・キリストを前面に押し出して教えるという内容であります。

スポルジョンという人も、こう言っています。「私の兄弟たちよ。キリストを説教しなさい。いつでも絶えずキリストを説きなさい。キリストこそ福音の全体である。キリストの人格、その務め、その御業は、我々の唯一の偉大にしてすべてを包括する主題でなければならない。キリストがすべてであるような説教こそ祝福されるべきである。」“キリストがすべてであるかのような説教こそ、祝福されるべきものだ”という言葉が、とても印象的であります。キリストについて、というよりも、キリストご自身を宣べ伝えるという、そこには大きな違いがあるんですけども、私たちはイエス・キリストを歴史上の過去の人物として学んでいるではありません。今も生きてここにおられる方と、人格的な交わりを持つために、“知る”という作業をしているわけです。ですから、毎回毎回、聖書を開いて、或いはバイブルスタディーに参加して、得なければいけないことは、イエス・キリストを人格的に更に深く知る。そしてイエスとの関係が更に改善する、より良いものになる。そのような結果が伴わなければ、聖書を読む意味もないですし、ここに来て学ぶ時間というのは、何の価値もない時間になってしまいます。

そして、もう一つは、これもイギリスの説教者ですけども、J.S.スチュワートという人の言葉です。「もし、毎回の説教で我々がキリストを語らないとするならば、我々は説教の務めから直ちに退いて、他の務めを探すほうがマシである。」と。これも言い過ぎではありません。

もう一人はノルウェーの神学者でカール・ビスロフという人です。この人も福音派の世界的リーダーとして有名な人です。「説教はキリストの証しでなければならない。そうでなければ、それはキリスト教的説教と言うことは出来ない。」

そして、ロイド・ジョーンズの言葉も紹介します。「聖書は一冊の書物だ。旧約と呼び、新約と呼ばれる。しかし、一緒なのである。聖書は「種々の書物の集まった図書館である。」と、時に言われることがある。これほどとんでもない誤解はない。聖書は図書館ではない。一冊の書物である。66の部分によって構成されているが、ひとつの書であり、ひとつのテーマ、ひとつのメッセージだけを持っている。」続けてこう言っています。「聖書を二つの部分に分けて印刷する慣習を私は常々残念に思っている。人によっては、新約しか読まなくなるからだ。」旧約聖書と新約聖書を別々に分けて印刷するというのを、ロイド・ジョーンズは好みませんでした。よく新約聖書だけの分冊というものがあります。そういう新約だけを読んで、旧約聖書は「昔の話だし、現代的でないので、あまり自分とは関係ない。」というふうに考えてしまう人がやっぱり居ますので、そういう弊害があると。「旧約聖書はユダヤ人のものであって、異邦人の私たちとは関係ない。」とか、「旧約聖書には恵みがほとんど言及されていないから、だから私は新約しか読まないんです。」と言う人も残念ながらあります。ですから、出来たら旧約・新約満遍なく読むことが大事です。「聖書に興味がある人がいるので、聖書をプレゼントしてあげたいんだけども。」と言って新約聖書だけをあげる人もありますけれども、出来たら旧約・新約全部あげて欲しいと思います。ただ、ギデオンの聖書なんかは新約だけですので、それも残念なことですけども、是非旧約と新約を合わせてプレゼントして欲しいなど、昔からそう思っていますけれども。勿論分厚いのでお金もかかりますが、でも、それは実は半分だけの内容なんです。この学びでも皆さんはお気付きになっていると思いますけれども、新約聖書は旧約聖書無しには、理解出来ないんです。なのに、新約しかあげないというのは、どうかと。ですから、出来たら旧約・新約両方読むように勧めながらプレゼントしたりすれば良いかと思っておりますけれども。とりあえず、私たちは、旧約聖書も新約聖書も、今イエス・キリストというひとつのテーマを持ったものとして、この時間先週に続き後半として見ていきますので、全体的には本当に大まかなことしか述べるのが出来ませんが、しっかりとイエス・キリストというテーマを押さえて頂ければ、どの書を学んでも

皆さんは理解出来ると思いますし、また正しく伝えることも出来ようかと思います。聖書理解の鍵はイエス・キリストであるということを、改めて皆さんに強調しておきたいと思います。イエス・キリストを知るという目的で聖書を開いて下さい。正しく理解したければ、イエス・キリストを知るということを努めて頂きたいと思います。

これが新約聖書の時代の使徒たちの教え方でもあったということです。それをちょっと難しく言いますと、『キリスト論的解釈』と言います。Christ logical principle と英語で言います。これが新約聖書の時代、使徒たちが教えていたバイブル・スタディーのスタイルだったということです。旧約聖書の中からイエス・キリストについて教えるというスタイル、それを『キリスト論的解釈』と言います。それを私たちが当然引き継がなければいけません。

使徒の働きを確認のためにもう一度いくつかの箇所を開いてから、本題に入っていきたいと思います。使徒の働き 3:18 『しかし、神は、すべての預言者たちの口を通して、キリストの受難をあらかじめ語っておられたことを、このように実現されました。』つまり、旧約聖書にキリストの受難について預言されていたわけですが、それが果たしてナザレのイエスにおいて成就したということ、ここではペテロが教えているわけです。これが、『キリスト論的解釈』というものです。

また、同じく使徒の働き 10:43 『イエスについては、預言者たちもみな、この方を信じる者はだれでも、その名によって罪の赦しを受けられる、とあかししています。』“預言者たちもみな”というのは、旧約聖書のことを言っています。旧約聖書は、“イエスについては、この方を信じる者はだれでも救われる。”という内容です。

使徒 26:22, 23 も『²²こうして、私はこの日に至るまで神の助けを受け、堅く立って、小さい者にも大きい者にもあかしをしているのです。そして、預言者たちやモーセが、後に起こるはずだと語ったこと以外は何も話しませんでした。²³すなわち、キリストは苦しみを受けること、また、死者の中からの復活によって、この民と異邦人に最初に光を宣べ伝える、ということです。』これはパウロが言っている言葉ですが、これも全部『キリスト論的解釈』という初代教会のリーダーたちが教えたバイブルスタディーのスタイルです。全部旧約聖書からイエス・キリストについて、宣べ伝えているということです。旧約聖書から福音を語っているということです。旧約聖書に福音があるんです。福音というのは新約聖書のみにあると思ったら、大間違いです。逆に言いますと、新約聖書の福音は旧約聖書を理解しない限りは完全な理解とはならないということです。

そして、ローマ 1:1~4。『¹神の福音のために選び分けられ、使徒として召されたキリスト・イエスのしもべパウロ、²この福音は、神がその預言者たちを通して、聖書において前から約束されたもので、(福音は旧約聖書に約束されていたもの、そこに存在していたものだと言っています。)³御子に関することです。(福音は旧約聖書に記されていて、それは御子イエス・キリストに関することです。)⁴御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ、⁴聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方、私たちの主イエス・キリストです。』こうやって新約聖書の中にすべて『キリスト論的解釈』として、旧約聖書のテーマはイエス・キリストであって、旧約聖書に福音は述べられていると。

第1コリント 15:3~5 も同じことを言っています。『³私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに (これは勿論旧約聖書の示すとおりにという意味です。)、私たちの罪のために死なれたこと、⁴また、葬られたこと、また、聖書に従って三日目によみがえられたこと、⁵また、ケパに (ペテロに) 現われ、それから十二弟子に現われたことです。』これが福音だと、第1コリント 15:1 (『兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私があなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立って

いる福音です。』) から読んで頂くと、これこそが福音の定義だとパウロは言っています。その福音の定義はすべて旧約聖書の中に見られるということです。

そして、旧約聖書の最後の、旧約時代のと言った方が厳密でしょうか。旧約聖書の最後の預言者と言え、それはバプテスマのヨハネです。バプテスマのヨハネは、新約聖書の時代に出てくる人物ですけれども、でも「**預言者はヨハネまでだ。**」とイエスご自身がおっしゃっていますので、実はバプテスマのヨハネまでが旧約であって、そして旧約最後のバプテスマのヨハネは、来るべき約束のメシヤであるイエスのことを指差して、イエスがキリストであることを証ししたわけです。そんな彼のことをイエスはこのように評しました。マタイ 11:11 によれば『**女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネよりすぐれた人は出ませんでした。**』“女から生まれた者”というのは、アダムを除いた人たちのことを言っています。つまり、ノアや、またモーセや、アブラハムや、モーセよりも、ダビデよりも、バプテスマのヨハネは偉大であると。そうイエスがおっしゃっているわけです。ですから、間違いないですね。最高評価をしているわけです。でも、バプテスマのヨハネは、特段眼を見張るような奇跡を行なったわけではありません。あのエリヤのように天から火を降らすような、そんなこともしていません。実に地味な活動しかしていません。その地味な活動というのは、ただひたすらイエス・キリストを指し示すというミニストリーです。ヨハネの福音書 1:7,8 『**7 この人はあかしのために来た。(この人というのがバプテスマのヨハネです。) 光についてあかしするためであり、すべての人が彼によって信じるためである。8 彼は光ではなかった。ただ光についてあかしするために来たのである。**』勿論この“光”というのは、その前を読んで頂くと、イエス・キリストであるということは明らかです。バプテスマのヨハネは、光であるイエス・キリストを証しするために来た、終始一貫バプテスマのヨハネはイエス・キリストを証しすることに生きたわけです。そして、その彼の働きが最大に評価されたわけです。しかし、実はイエス・キリストは、バプテスマのヨハネに最大の賛辞を与えるにとどまらず、『**しかも、天の御国の一番小さい者は、そのヨハネよりも優れている。**』

(マタイ 11:11 後半) と付け加えています。その“最も小さい者”とは誰か、というと、私たちのことです。バプテスマのヨハネよりも優れているのは、後にイエス・キリストを信じる私たちクリスチャンのことです。なぜならば、私たちはバプテスマのヨハネ以上に、イエス・キリストを証しする者としてこの世で召されていくからです。ヨハネは私たちよりもイエスのことを知らなかったんです。私たちはヨハネ以上にイエス・キリストのことを知る者として伝えることが出来ます。私たちは新約聖書を持っています。バプテスマのヨハネは新約聖書を持っていませんでした。私たちは聖霊をもっています。バプテスマのヨハネは聖霊をもっていないでした。私たちは教会に属しています。バプテスマのヨハネはたった一人でした。そういったことから見ても、私たちはバプテスマのヨハネよりも遥かにイエス・キリストに近い者で、イエス・キリストの花嫁とも呼ばれていますし、イエス・キリストのからだとも呼ばれているわけです。ヨハネは全然違う立場です。ですから、自分たちの身分ももう一度考え直して頂きたいと思います。私たちはそのような特権に与っている者で、私たちもヨハネに倣って、イエス・キリストを証しするために皆ここに生かされているということです。イエスの目からすると私たちは優れた者です。ノアよりも、またアブラハムよりも、そしてダビデよりも、エリヤよりも、ダニエルよりも、もっと優れた者。バプテスマのヨハネよりも優れた者であると、これはイエスがおっしゃっているんです。ですから、その言葉を知りながらも、「私は無力だから、無能だから、何も分かっていないし、何も出来ないから。」なんて言わないで下さい。それはイエスの言葉にも反しますし、また旧約聖書の時代の人たちに失礼です。彼らは私たちが知りたいと思うその知識を、喉から手が出る程欲しかったんです。でも、彼らはそれが許されなかったんです。ですから、もう一度今私たちがこうして聖書を全部手にして、自由にいつでもどこでも開いて読めるというその特権、そして内に住む聖霊が私たちにいつも教えて下さるとい、すべての真理に導き入れて下さるといこの恵みを、決しておろそかにしないで頂きたいと思います。そして、聖霊の働き

もイエス・キリストを証しすることだとヨハネ 15 : 26 に書いてあります。『わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。』それが本当に聖霊の働きかどうか、眉唾ものだと判断に迷う時は、この言葉を思い起こして下さい。聖霊はイエスを証しするんです。ですから、イエスを証ししていないようなものは、最早聖霊の働きではありません。人々は自分たちのやっていることを正当化したいので、これは聖霊の働きだとか、これは油注ぎだとか、いろんなことを言うわけですがけれども、でも判断基準は明確です。単純明快です。それは、イエス・キリストのものを受けて、イエス・キリストのものを証ししているかどうかです。そこにイエス・キリストが全く感じられないならば、イエス・キリストに似ても似つかないならば、イエス・キリストだったら絶対にしないだろうということをやっているならば、それはもう聖霊の働きではありません。ですから、見分けは難しくありません。簡単です。私たちの内に聖霊が住んでいますから、私たちを通して聖霊はイエス・キリストを証しして下さいます。それが聖霊の働きであって、私たちの願い事を叶えるのが聖霊の働きではありません。私たちがやりたいことをやる、そのための力を与えてくれるのが聖霊じゃないんです。あなた方が聖霊を受けるといえるのは、イエスの証しとなるためだと、使徒 1:8 にもハッキリ書いてあります。『**しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。**』』その“力”とは、世界の果てまでにイエス・キリストを証しするためだと、そこにハッキリ書いてありますので、私たちもただイエス・キリストを知るだけではなくて、イエス・キリストを知らせるといってその働きに与っていて、そして私たちがそのために必要なものはすべて頂いている。聖書もあるし、66 巻全巻揃っているわけです。しかも、内住の聖霊も頂いているわけです。加えて今は世の終わりの時代で、イエス・キリストがいつ戻って来てもいいという、終末預言が今日の前で成就しているような、非常にエキサイティングなその時期に私たちは生かされていますので、聖書に対しては益々私たちは信頼を置くことが出来ます。

旧約聖書の中にイエス・キリストが現れているということ、これまで『創世記』から『詩篇』まで学んで来ました。そこに受肉前のキリストが実際に登場している場面も、実際に聖書を開いて見てきました。それを『キリスト顕現』と専門用語で言います。『キリスト顕現』、顕現というのは“現れる”という意味の単語です。顕微鏡の顕に、現（現れる）という字です。現実の現です。それで『キリスト顕現』と言います。英語では“Christfany”と言います。

もう一つは、『受肉前のキリスト』という表現、preincanate christ 英語でそう言います。『受肉後のキリスト』というのがクリスマス以降のいわゆる福音書に出て来るキリストです。でも、その前のキリストのことを『受肉前のキリスト』、肉を受ける前、受肉前のキリストと言います。

ヨハネ 8 : 58 を開いて見て下さい。『イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。アブラハムが生まれる前から、わたしはいるのです。』」“アブラハムが生まれる前から”、アブラハムというのはこのヨハネの福音書の、新約聖書の時代からしますと、二千年前の人です。今から四千年前の人です。でも、イエスはアブラハムよりも前から存在していたと、そうおっしゃったわけです。しかも、“わたしはいるのです。”というところに新改訳聖書は*印が二つ付いております。この*印というのは実際には、ギリシャ語では“エゴー・エイミー”という言葉であって、“わたしはあるという者である。”という、これは出エジプト記 3 章において燃える柴の中から神が、これも受肉前のキリストなんですが、モーセに明かした名前、“わたしはあるという者である。”と。“エヒイエ・アシェル・エヒイエ”というヘブル語ですが、そのギリシャ語訳が“エゴー・エイミー”というわけです。つまり、イエスは「わたしこそがあの燃える柴の中からモーセに語ったものである。」と。「わたしはあるという者だ。」と。ヤーウェ宣言とも言います。神の個人名、ヤーウェという名前の由来が、“わたしはあるという者である。” I am that I am. です。それがヤーウェという名前の意味です。その“エゴー・エイミー”というのがギリシャ語なん

ですが、新約聖書の特にヨハネの福音書には、繰り返し繰り返しイエスがエゴ・エイミー” 宣言をしています。これは神にしか口にする事の出来ない言葉ですから、実際にヨハネ 8 : 59 を見ると、『すると彼らは石を取ってイエスに投げつけようとした。』そのぐらいでどうして石なんか投げつけようとするのかと、異邦人の私たちにはピンとこないかもしれませんが、ユダヤ人からしたらもう明確です。イエスはハッキリと「わたしはヤーウェだ。」と言ったんです。「これは神への冒瀆だ」と、もう即刻その場で処刑しようとしたわけです。ですから、59 節を見れば 58 節のイエスの宣言がどれ程重いものであったのかということが分かるかと思えます。勿論イエスは石打ちの刑で死ぬわけにはいきませんので、十字架刑に掛かって死なれるというのが旧約聖書に預言されているところでもあります。ですから、アブラハムよりも前から、キリストは受肉前のキリストとして存在しておられたということです。

また、創世記 22 章。アブラハムより前にキリストは存在していたというところで確認して頂きたいと思えます。ここは有名な箇所なので、頭から読むことはいたしません、アブラハムの最後にして最大の試練、ひとり子イサクを神に全焼の生贄としてささげよというところ。130 歳の老人のアブラハムがひとり子イサクを、30 歳の息子をロープで縛って、祭壇の上に乗せて、火で灰にするまで焼き殺すという、そういう無理難題を命令されたわけです。それに対してアブラハムは、従ったわけです。正に息子をほふるろうとしたその時に、ストップがかかったわけです。創世記 22 : 10 のところに『¹⁰アブラハムは手を伸ばし、刀を取って自分の子をほふるろうとした。¹¹ そのとき、主の使いが（太字の主ですから、ヤーウェの使いが）天から彼を呼び、「アブラハム。アブラハム。」と仰せられた。彼は答えた。「はい。ここにおります。」¹² 御使いは仰せられた。「あなたの手を、その子に下してはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた。』と、御使いが言ってるんです。アブラハムは御使いにイサクをささげたわけじゃないです。アブラハムは主に、ヤーウェにひとり子をささげることをしたんですが、でも、ここで主の使いは“わたしに”と言ってます。『¹³アブラハムが目を上げて見ると、見よ、角をやぶにひっかけている一頭の雄羊がいた。アブラハムは行って、その雄羊を取り、それを自分の子の代わりに、全焼のいけにえとしてささげた。』その続き 15 節のところに“主の使い”が出てきます。それ以降も“主の使い”が、アブラハムに約束の言葉を与えています。これは言うまでもない受肉前のキリストであります。“主の使い”というフレーズが出て来たら、例外なく受肉前のキリストであるということ。強いて一つだけ挙げれば、ハガイ書にハガイ自身が自らを“主の使い”と言っているところがあります。でも、そこは明確です。主の使いはハガイとそこに明記されていますので、それ以外は受肉前のキリストです。ただの天使ではないということです。

そして、もう一度、前後しましたけれども、ヨハネ 12 : 39。『³⁹彼らが信じることができなかつたのは、イザヤがまた次のように言ったからである。⁴⁰「主は彼らの目を盲目にされた。また、彼らの心をかたくなにされた。それは、彼らが目で見、心で理解し、回心し、そしてわたしが彼らをいやす、ということがないためである。」⁴¹イザヤがこう言ったのは、イザヤがイエスの栄光を見たからで、イエスをさして言ったのである。』預言者イザヤはイエスよりも 700 年以上も前の預言者です。ところがその 700 年以上も前の預言者イザヤが、「イエスの栄光を見た。」と言っているんです。そこはどの場面かと言うと、イザヤ書 6 章の場面です。そこも皆さんに聞いて頂いて、1 節に『¹ウジヤ王が死んだ年に、私は、高くあげられた王座に座しておられる主を見た。（私というの、イザヤです。イザヤは主を見た。この主は太字ではありません。普通字の主です。ヘブル語では“アドナイ”と言います。人間の主人に対しても使う言葉です。）そのすそは神殿に満ち、²セラフィムがその上に立っていた。（セラフィムというの、ケルビムに並んで御使いの最高位のものであります。神の臨在で一番近いところにいる、位の高い天使のひとりです。）彼らはそれぞれ六つの翼があり、おのおのその二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでおり、³

互いに呼びかわして言っていた。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。(この主は太字ですから、ヤーウエです。)その栄光は全地に満つ。」⁴その叫ぶ者の声のために、敷居の基はゆるぎ、宮は煙で満たされた。⁵そこで、私は言った。「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見ただから。」』イザヤが見た“万軍の主である王”はイエスだと、ヨハネの12章41節に書いてあったわけです。そして8節を見て頂くと『私は、「だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう。」(われわれと言っています。)と言っておられる主の声を聞いたので、言った。「ここに、私がおります。私を遣わしてください。』9節の内容(『すると仰せられた。「行って、この民に言え。『聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな。』』)がヨハネの12章でも引用されている言葉です。“聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主”これは、三位一体の神に帰せられている三重唱と言って良いと思います。父なる神、子なる神、聖霊なる神。どれもヤーウエと呼ばれるわけですが、特にここでイザヤが見たのは、イエスの栄光だと。ですから、イエスはヤーウエと呼ばれる方で、イエスは間違いなく三位一体の神のおひとり、第2位格、子なる神であるということが明らかです。そのようにしてキリスト顕現、或いは受肉前のキリストが度々登場している。これが旧約聖書のそこかしこに登場していますので、そういったところに常に私たちは目を留めるべきです。

その他にも直接的ではありませんけれども、たとえばキリストのタイプというものも出てきます。英語でタイプというのは、日本語では“予型”と言います。これも神学用語ですが、予型論、タイポロジーという学問があります。人物とか、事物とか、或いは事件、職務、行為、旧約聖書にいろんなものが出てきます。それぞれがあるタイプを表している。予型となっている。ひな型と言って良いかもしれません。それらがキリストを表すというものがあるわけです。

或いは象徴というものもあります。シンボリズム。キリストの象徴というものもあります。ですから、旧約聖書の中にそのようなキリスト顕現、受肉前のキリスト、或いはキリストの予型、そして象徴、勿論預言というもの、そういったものを探して頂きながら、すべてはイエス・キリストを指し示していく。全部イエスに結びついているんだということ。それが聖書の正しい読み方、正しい解釈の仕方。そうやってキリストを前面に押し出して、キリストを語る。それが健全な説教というものであります。

今度は前回の続きとして、前回は『創世記』から『詩篇』まで見てきました。それぞれの書にイエス・キリストが描かれていて、またいろんな人格、働きが強調されていたわけですが、今日は20番目の書『箴言』から見ていきたいと思えます。『箴言』は“神の知恵”、これがテーマです。その“神の知恵”とは、実はイエス・キリストのことを言っています。箴言の8章、そこに知恵が擬人化されています。たとえば17節のところ『わたしを愛する者を、わたしは愛する。わたしを熱心に捜す者は、わたしを見つける。』この“わたし”と言っているのは、知恵です。知恵が擬人化されているわけです。そして、22節のところを見て下さい。『²²主は、その働きを始める前から、そのみわざの初めから、わたしを得ておられた。²³大昔から、初めから、大地の始まりから、わたしは立てられた。²⁴深淵もまだなく、水のみなざる源もなかったとき、わたしはすでに生まれていた。(これは創世記の1章を思い起こさせます。)²⁵山が立てられる前に、丘より先に、わたしはすでに生まれていた。²⁶神がまだ地も野原も、この世の最初のちりも造られなかったときに。²⁷神が天を堅く立て、深淵の面に円を描かれたとき、わたしはそこにいた。(この“円”というのが地球を造ったというところです。)²⁸神が上のほうに大空を固め、深淵の源を堅く定め、²⁹海にその境界を置き、水がその境を越えないようにし、地の基を定められたとき、³⁰わたしは神のかたわらで、これを組み立てる者であった。わたしは毎日喜び、いつも御前で楽しみ、³¹神の地、この世界で楽しみ、人の子らを喜んだ。』この擬人化された知恵こそは、受肉されたことばであるイエス・キリストを表すものであります。イエスは天地創造の働きにも関与されました。これはヨハネの1章にも書いてあります。『す

べてのものはこの方によって造られた。』と。ヨハネの1章も創世記の1章と呼応しております。それは箴言の8章においても確認されるというものであります。

そして、ルカ 11：49（『だから、神の知恵もこう言いました。『わたしは預言者たちや使徒たちを彼らに遣わすが、彼らは、そのうちのある者を殺し、ある者を迫害する。』）にはイエスのことが神の知恵とされています。これはイエスご自身が言っています。

さらに第1コリント 1：24と30節。これはパウロが言っている言葉です。『²⁴しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。³⁰しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとになりました。』

ですから、『箴言』は神の知恵であるイエス・キリストに関する書物だということが分かります。いろんな格言とか、私たちの生活の指針になるものがいっぱい、ことわざのような戒めになる役に立つ言葉が散りばめられていますけれども、実はそれはイエス・キリストを指し示すものであります。

次に21番目の書物として『伝道者の書』について言いますが、『伝道者の書』Ecclesiastes、これは人の行いを裁く審判者としてのキリストを描いています。最後の12章14節を見て下さい。『神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ。』これが、『伝道者の書』の結論です。冒頭には『空の空。すべては空。』と、諸行無常だと言って、何もかもがもう空しいということを行っているんですけども、それは勿論神抜きには、何もかも空しいということです。ですから結論として『神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれる。』それが勿論イエスを指しているわけです。マタイ 16：27にこう書いてあります。『人の子は父の栄光を帯びて、御使いたちとともに、やがて来ようとしているのです。その時には、おのおのその行ないに応じて報いをします。』

使徒 10：42『イエスは私たちに命じて、このイエスこそ生きている者と死んだ者とのさばき主として、神によって定められた方であることを人々に宣べ伝え、そのあかしをするように、言われたのです。』

またローマ 2：16『私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日に、行なわれるのです。』イエス・キリストというと、すぐに救い主というふうにイメージされると思いますが、それはひとつの側面に過ぎません。イエス・キリストはすべての人のさばき主。隠れたこともさばかれる方と、ハッキリ書いてあります。これは伝道者の書に一致しています。すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれる方。それは、イエス・キリストであります。

他にもこれはクリスチャンに対しても語られていることで、第2コリント 5：10。クリスチャンはイエス・キリストを救い主として信じていますので、もうその罪をさばかれることはありません。でも、私たちは自分の行いに応じて報いを受けるためにさばかれるということも知らなくてははいけません。『なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。』私たちは皆というのは、例外なくクリスチャンであれば全員、キリストのさばきの座に立ちます。でも、その時勿論私たちは罰せられることはありません。救いを失って地獄に行くということはまずありません。そうではなくて、この時代に私たちがこの肉体をもって成したこと一つ一つを問われて、それが神の栄光を現すためであったのか、キリストの御名をあがめるために行なったのかどうか。それとも自分の栄光のために、自分の肉欲のためにしたのか。全部それらがさばかれます。そして、それに対して天の報いが算定されます。これを私たちは表彰台の前で受けるんです。“さばき”という言葉は“ビーマ”というギリシヤ語です。“ビーマ”というのは、オリンピックの表彰台を指す言葉なので、私たちはそこで冠を受けるわけです。今で言えばメダルを受けるわけです。たくさん冠を

受ける者もあれば、そうでもない人もあるわけです。「いっぱい私は頑張りました。真面目に働きました。社会に貢献しました。たくさん財産を残しました。」でも、キリストのさばきの座に立った時に、その人はもしかしたらほとんど冠をもらえないかもしれません。そういうさばきもなさるお方です。

あとは黙示録 20 : 12~15。『¹²また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところから従って、自分の行ないに応じてさばかれた。¹³海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのおの自分の行ないに応じてさばかれた。¹⁴それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。¹⁵いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。』これは最後の審判も行なうお方です。大きな白い御座のさばき。日本語で昔から御白州というものが、正にこれです。大きな白い御座のさばき。これがいわゆる最後の審判です。クリスチャンはここには、法廷に立ちません。これはイエス・キリストを拒絶した人たちが最後に受ける審判です。ここでゲヘナに投げ込まれるわけです。いわゆる地獄に堕ちていくという最後の審判が下されるところです。これもイエスが行います。

次に 22 番めの書『雅歌』。Song of Solomon。ソロモンの歌ということです。でも、原題は“歌の中の歌”最上の歌というのがヘブル語の書名であります。聖書の中で一番優れた歌、それが『雅歌』です。『詩篇』も優れていますけれども、『詩篇』以上に『雅歌』は優れているということです。なぜならば、それはイエス・キリストと教会のラブ・ソングだからです。説教のプリンスと呼ばれたチャールズ・ハットン・スポルジョンが最も愛した書物、それが『雅歌』です。この開かれた『雅歌』が彼の棺の上に置かれて、彼の葬儀は行なわれました。聖書の中で 1 書を選ぶとしたら、スポルジョンは「迷うこと無く『雅歌』を選んで、雅歌からキリストを語る。」とそう言っています。ですから、是非皆さんにも『雅歌』を好きになって欲しいと思います。

『雅歌』では勿論イエスは教会の花婿として描かれています。雅歌 2 : 16『私の愛する方は私のもの。私はあの方のもの。あの方はゆりの花の間で群れを飼っています。』羊飼いと現れています。

雅歌 4 : 9『私の妹、花嫁よ。あなたは私の心を奪った。あなたのただ一度のまなざしと、あなたの首飾りのただ一つの宝石で、私の心を奪ってしまった。』と語るのはキリストです。妹、花嫁。これが私たちのことです。こんなラブ・ソングは他に見ることは出来ません。聖書の中に類を見ないものです。昔は、花嫁のことを古語で妹と言いました。そして結婚することを“妹背を契る”と言います。ですから、近親相姦とかそういう意味ではなくて、妹というのは妻のことを言います。“妹背を契る”と言うのは、日本でも昔から婚姻するということです。心を奪われるような美しさが私たちにあるのはなぜか。それはイエス・キリストが私たちのために血を流してすべての罪を洗い清めて下さったから。しみもしわもそのようなものが何一つ無い聖い花嫁として、栄光の花嫁として、キリストが立たせて下さったから、というのが新約聖書に書かれている内容です。

後で言いますが、まずはマタイ 9 : 15『イエスは彼らに言われた。「花婿につき添う友だちは、花婿がいっしょにいる間は、どうして悲しんだりできましょ。しかし、花婿が取り去られる時が来ます。その時には断食します。』“花婿”というのはイエスのことです。そして、“花婿につき添う友だち”これはバプテスマのヨハネもそうですし、弟子たちもそうです。ですが、“花嫁”は私たち教会であります。

そしてマタイ 25 : 1~13 の十人の娘のたとえのところでは、ここでは花婿としてイエスのことがたとえられています。花婿であるキリストがやって来るのに、十人の娘が油を絶やさずに待機しているかどうか。5 人は賢く油を絶やさずに備えていましたが、あとの 5 人は愚かな娘として油を切らして、文字通り油断していたということです。

次にヨハネ 3:29。『花嫁を迎える者は花婿です。そこにおいて、花婿のことばに耳を傾けているその友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。それで、私もその喜びで満たされているのです。』花婿の声を聞いて大いに喜んでい友人とはバプテスマのヨハネのことだと。これは前後を読めば分かります。ですから、私たちはバプテスマのヨハネよりも優れた者です。なぜならば、キリストの花嫁だからです。

そして、第2コリント 11:2。『というのも、私は神の熱心をもって、熱心にあなたがたのことを思っているからです。私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。』聖書にはクリスチャンのことは、“神の子供”とも呼ばれます。“子供”というのは実は、文字通りは、『息子』という言葉です。神の息子。それは女性のクリスチャンでもイエスを信じたら神の息子になるんです。でも、それはフェアじゃないと思うかもしれませんが、でもここでは男もキリストの花嫁になります。ですから even です。どっちも全然問題ありません。違和感を感じるかもしれませんが、神の目からそう見えるわけです。私たちは神の息子。息子でなければ相続人になれないわけです。でも、同時にキリストの花嫁でもあるわけです。でも、天においては男女という性別はないわけですから、そういうこだわりは勿論ありません。あくまで、これはポジション・立場のことを言っています。ですから、花嫁と言われても、男としては「ピンとこない。」とか、「気持ち悪い。」とか思わないで下さい。或いは神の息子と呼ばれて、「私は女であることを誇りに思っているのに。」いろいろあるかもしれませんが、でもあとには性同一性障害とか、そういうふう悩んでいる方も問題ありません。天に行ったら、そんなものは一切なくなりますから、悩まないでイエス・キリストを信じて下さい。そして、神の息子となって、キリストの花嫁となって欲しいと思います。それが本当のアイデンティティーであって、男か、女か、なんてことで悩む必要は、キリストにおいては全くありませんので、そのアイデンティティーで同性愛とかにはしるようであれば、是非イエス・キリストを信じて、本物のアイデンティティーを頂いて欲しいと思います。

それはそれとしまして、他にもエペソ 5:25~27『²⁵ 夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。²⁶ キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いををもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、²⁷ ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。』ですから、キリストは花婿で、教会は花嫁です。クリスチャンの夫婦は、夫はキリストのようであり、そして妻は教会のようであって、クリスチャンの夫婦はキリストと教会の関係を表すために結婚しました。それ以外の目的はありません。勿論子供を産んで、“生めよ、増えよ。”という神の命令に従って、家族をもうけていく。勿論それは確かに原初の時代からの夫婦の機能のひとつですけれども、でも本来は夫婦というのは、キリストと教会の関係を表すのが真の目的であって、それ以外の目的で結婚しても実際には満たされることはありません。ただ、幸せになりたいとか、あなたの夫がイエスだったら問題ないですけれども、でも私たちはキリストと教会の関係を表すようにデザインされてそのように結ばれた者であります。ですから、これはクリスチャン夫婦の話をしてはいますが、ノンクリスチャンの伴侶と今連れ添っていても、是非そこを目指して頂きたいと思います。勿論、その前に救われる必要がありますので、必死になって夫のために、妻のために、とりなして頂いて、そして救われた暁には、キリストと教会の関係を表す夫婦として晴れて、また新たな思いでそれこそ新しく結婚しなすかのように、新婚のようになって再スタートして頂きたいと思います。

そして黙示録 19:7『私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。小羊の婚姻の時に来て、花嫁はその用意ができたのだから。』

黙示録 21:9『また、最後の七つの災害の満ちているあの七つの鉢を持っていた七人の御使いのひとりが来た。彼は私に話して、こう言った。「ここに来なさい。私はあなたに、小羊の妻である花嫁を見せましょう。』

黙示録 22 : 17『御霊も花嫁も言う。「来てください。」これを聞く者は、「来てください。」と言いなさい。渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。』

私たちが将来キリストの花嫁として天で過ごす姿がそこに描かれています。

23 番目の書『イザヤ書』に移ります。イザヤ書は“第 5 の福音書”と呼ばれている位なので、イエス・キリストのことが旧約聖書の中でも非常に豊富に鮮烈に描かれています。その中では、『不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君』これは 9 章 6 節（『ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。』）にそう書いてあります。全部イエス・キリストの名前、肩書きです。称号です。そしてもうひとつはそれとは対称的に“苦難のしもべ”とも呼ばれています。53 章丸々それがテーマとなっています。

実際に苦難のしもべの歌というのがイザヤ書に 4 つあります。一番目の苦難のしもべの歌、つまりイエスの歌のことを言っていますが、42 章 1~4 節、若しくは 42 章 1~9 節までテーマがあります。どこで切るかは、区分の仕方がいろいろあるんです。42 章 1~4 節、若しくは 42 章 1~7 節、若しくは 42 章 1~9 節とかいろいろあります。2 番目の苦難のしもべの歌は 49 章 1~6 節。3 番目は 50 章 4~9 節。4 番目が一番有名なものです。52 章 13 節から 53 章 12 節まで。53 章丸々ということです。それが全部イエス・キリストです。

※ 苦難のしもべの歌① イザヤ 42 : 1~9

『¹見よ。わたしのささえるわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしが選んだ者。わたしは彼の上におわたしの霊を授け、彼は国々に公義をもたらす。²彼は叫ばず、声をあげず、ちまたにその声を聞かせない。³彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともなく、まことをもって公義をもたらす。⁴彼は衰えず、くじけない。ついには、地に公義を打ち立てる。島々も、そのおしえを待ち望む。⁵天を造り出し、これを引き延べ、地とその産物を押し広め、その上の民に息を与え、この上を歩む者に霊を授けた神なる主はこう仰せられる。⁶「わたし、主は、義をもってあなたを召し、あなたの手を握り、あなたを見守り、あなたを民の契約とし、国々の光とする。⁷こうして、盲人の目を開き、囚人を牢獄から、やみの中に住む者を獄屋から連れ出す。⁸わたしは主、これがわたしの名。わたしの栄光を他の者に、わたしの栄誉を刻んだ像どもに与えはしない。⁹先の事は、見よ、すでに起こった。新しい事を、わたしは告げよう。それが起こる前に、あなたがたに聞かせよう。』

※ 苦難のしもべの歌② イザヤ 49 : 1~6

『¹島々よ。私に聞け。遠い国々の民よ。耳を傾けよ。主は、生まれる前から私を召し、母の胎内にいる時から私の名を呼ばれた。²主は私の口を鋭い剣のようにし、御手の陰に私を隠し、私をとぎすました矢として、矢筒の中に私を隠した。³そして、私に仰せられた。「あなたはわたしのしもべ、イスラエル。わたしはあなたのうちに、わたしの栄光を現わす。」⁴しかし、私は言った。「私はむだな骨折りをして、いたずらに、むなしく、私の力を使い果たした。それでも、私の正しい訴えは、主とともにあり、私の報酬は、私の神とともにある。」⁵今、主は仰せられる。—主はヤコブをご自分のもとに帰らせ、イスラエルをご自分のもとに集めるために、私が母の胎内にいる時、私をご自分のしもべとして造られた。私は主に尊ばれ、私の神は私の力となられた。—⁶主は仰せられる。「ただ、あなたがわたしのしもべとなって、ヤコブの諸部族を立たせ、イスラエルのとどめられている者たちを帰らせるだけではない。わたしはあなたを諸国の民の光とし、地の果てにまでわたしの救いをもたらす者とする。』

※ 苦難のしもべの歌③ イザヤ 50 : 4~9

『⁴神である主は、私に弟子の舌を与え、疲れた者をことばで励ますことを教え、朝ごとに、私を呼びさまし、私の耳を開かせて、私が弟子のように聞くようにされる。⁵神である主は、私の耳を開かれた。私は逆らわず、うしろに退きもせず、⁶打つ者に私の背中をまかせ、ひげを抜く者に私の頬をまかせ、侮辱されても、つばきをかけられても、私の顔を隠さなかった。⁷しかし、神である主は、私を助ける。それゆえ、私は、侮辱されなかった。それゆえ、私は顔を火打石のようにし、恥を見てはならないと知った。⁸私を義とする方が近くにおられる。だれが私と争うのか。さあ、さばきの座に共に立とう。どんな者が、私を訴えるのか。私のところに出て来い。⁹見よ。神である主が、私を助ける。だれが私を罪に定めるのか。見よ。彼らはみな、衣のように古び、しみが彼らを食い尽くす。』

※ 苦難のしもべの歌④ イザヤ 52 : 13~53 : 12

『¹²あなたがたは、あわてて出なくてもよい。逃げるようにして去らなくてもよい。主があなたがたの前に進み、イスラエルの神が、あなたがたのしんがりとなられるからだ。¹³見よ。わたしのしもべは栄える。彼は高められ、上げられ、非常に高くなる。¹⁴多くの者があなたを見て驚いたように、—その顔だけは、そこなわれて人のようではなく、その姿も人の子らとは違っていた。—¹⁵そのように、彼は多くの国々を驚かす。王たちは彼の前で口をつぐむ。彼らは、まだ告げられなかったことを見、まだ聞いたこともないことを悟るからだ。

(イザヤ 53 章)

¹私たちの聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕は、だれに現われたのか。²彼は主の前に若枝のように芽生え、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。³彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。⁴まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。⁵しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。⁶私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。⁷彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。⁸しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。⁹彼の墓は悪者どもとともに設けられ、彼は富む者とともに葬られた。彼は暴虐を行わず、その口に欺きはなかったが。¹⁰しかし、彼を砕いて、痛めることは主のみこころであった。もし彼が、自分のいのちを罪過のためのいけにえとするなら、彼は未長く、子孫を見ることができ、主のみこころは彼によって成し遂げられる。¹¹彼は、自分のいのちの激しい苦しみのあとを見て、満足する。わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を彼がになう。¹²それゆえ、わたしは、多くの人々を彼に分け与え、彼は強者たちを分捕り物としてわかちとる。彼が自分のいのちを死に明け渡し、そむいた人たちとともに数えられたからである。彼は多くの人々の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする。』

9章6節『不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君』“不思議な助言者”は英語では Wonderful, Counselor です。ちなみに原文では Wonderful と Counselor は分けられています。“不思議”というのと、

“助言者”。つなげないで、これは『士師記』で、前回の学びの中で、受肉前のキリストが主の使いとしてマノアという人にその名を“不思議”として紹介しました。それと全く同じ言葉がイザヤ9:6で“不思議”と使われております。この方は“ワンドフルな方”、そして“助言者”カウンセラーです。ですから、私たちにはもうカウンセラーが与えられているわけです。どこかのクリニックに行かなくても大丈夫です。スクールカウンセリング、受けなくても大丈夫です。イエス・キリストはどのカウンセラーよりも優れたお方で、パーフェクトな方です。“力ある神”です。mighty God。“永遠の父” everlasting Father。そして、“平和の君” Prince of Peace これはヘンデルの『メサイア』に使われている場面です。ヘンデルのメサイアの歌詞はここから取られています。そして“苦難のしもべ” suffering servant

『イザヤ書』は非常に不思議な書で、全部で66章あるんですけども、前半の1章から39章までは不思議と旧約聖書の内容にピッタリです。後半の40章から66章は、新約聖書の内容にピッタリです。前半は39巻、1章から39章まで旧約聖書の内容にすべて呼応しています。後半の40章から66章の27章分は新約の27巻にピッタリ、それこそ年代順に並んでいます。ですから、全部時系列に並んでいるという、これは驚くべきものです。章とか節は、もともと無かったんですけども、でも不思議とイザヤ書に関しては、この66章からなる書物というのは、聖書66巻に呼応しています。

新約聖書の方に、使徒の働き8:26~35節。確認のために開いて下さい。これは伝道者ピリポによる“キリスト論的解釈”であります。『²⁶ところが、主の使いがピリポに向かってこう言った。「立って南へ行き、エルサレムからガザに下る道に出なさい。」(このガザは今、荒れ果てている。)(二千年経った今もガザは荒れ果てています。)²⁷そこで、彼は立って出かけた。すると、そこに、エチオピア人の女王カンダケの高官で、女王の財産全部を管理していた宦官のエチオピア人がいた。彼は礼拝のためエルサレムに上り、²⁸いま帰る途中であった。(ユダヤ教に改宗していたということです。過ぎ越しのお祭りをお祝いするためにエルサレムに巡礼に来ていたわけです。このエチオピアというのはかつてソロモンの知恵を聞きたいとしてやって来た南の女王の国です。)彼は馬車に乗って、預言者イザヤの書を読んでいた。²⁹御霊がピリポに「近寄って、あの馬車といっしょに行きなさい。」と言われた。³⁰そこでピリポが走って行くと、預言者イザヤの書を読んでいるのが聞こえたので、「あなたは、読んでいることが、わかりますか。」と言った。³¹すると、その人は、「導く人がなければ、どうしてわかりましょう。」と言った。そして馬車に乗っていっしょにすわるように、ピリポに頼んだ。³²彼が読んでいた聖書の箇所には、こう書いてあった。「ほふり場に連れて行かれる羊のように、また、黙々として毛を刈る者の前に立つ小羊のように、彼は口を開かなかった。³³彼は、卑しめられ、そのさばきも取り上げられた。彼の時代のことを、だれが話すことができようか。彼のいのちは地上から取り去られたのである。」(これはイザヤ書の53章8、9節であります。)³⁴宦官はピリポに向かって言った。「預言者はだれについて、こう言っているのですか。どうか教えてください。自分についてですか。それとも、だれかほかの人についてですか。」³⁵ピリポは口を開き、この聖句から始めて、イエスのことを彼に宣べ伝えた。』この聖句から始めて、イザヤ53章から始めて、旧約聖書の中からイエスについてキリスト論的解釈によってバイブル・スタディーをしたわけです。馬車の中のバイブル・スタディーです。すぐその後に36節で『道を進んで行くうちに、水のある所に来たので、宦官は言った。「ご覧なさい。水があります。私がバプテスマを受けるのに、何かさしつかえがあるでしょうか。」』と言って、イエスを信じた宦官。旧約聖書の中からイエスを信じて、そして即刻その場で水があったので彼はバプテスマを受けてます。そういうイザヤ書の中にもイエス・キリストが現れているということは、この使徒の8章からも明らかであります。

不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君というそれぞれのタイトルがイザヤ9:6にありますけれども、これも皆新約聖書の中にイエスとして見るのが出来ます。ローマ9:5『先祖たちも彼らのものです。またキリストも、人としては彼らから出られたのです。このキリストは万物の上であり、とこしえ

にほめたたえられる神です。アーメン。』そこにハッキリイエスが神だと書いてあります。

第2テサロニケ 1:12『それは、私たちの神であり主であるイエス・キリストの恵みによって、主イエスの御名があなたがたの間であがめられ、あなたがたも主にあつて栄光を受けるためです。』そこにもイエスが神だとハッキリ書いてあります。

第1ヨハネ 5:20『しかし、神の御子が来て、真実な方を知る理解力を私たちに与えてくださったことを知っています。それで私たちは、真実な方のうちに、すなわち御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。』そこにもイエスが神だとハッキリ書いてあります。

ヘブル 1:8『御子については、こう言われます。「神よ。あなたの御座は世々限りなく、あなたの御国の杖こそ、まっすぐな杖です。」そこにもイエスが神だとハッキリ書いてあります。

エペソ 2:14『キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、』そこは、イエスが私たちの平和であるとして書いてあります。平和・平安とは、イエス・キリストのことです。イエス・キリスト以外のところに平和とか平安を探しに行かないで下さい。イエス・キリストこそが平和である、平安であると言っています。“平和の君”と呼ばれているお方ですから、当然といえば当然です。戦争を無くしたい。そうしたらイエスを知ることから始めて下さい。争いをやめたい。そうしたらイエスを知ることから始めて下さい。和解したければ、仲良くしたければ、仲直りしたければ、イエスを知ることから始めて下さい。イエス以外のところに平和は存在しないということをあらためて覚えて頂きたいと思います。ですから、勿論助言を求めたければ、カウンセリングが必要ならば、イエスのところに行ってください。この方は、“力ある神”でもあり、“永遠なる父”でもあります。“父”というのは、お父さんという意味ではありません。父なる神がいるわけですから。父というのは創始者ということです。永遠の初め、起源、イエスは永遠のいのちそのものだとされています。さっき指摘した第1ヨハネ 5:20には、「イエスは永遠のいのちだ」とハッキリ書いてあります。ですから、永遠のいのちもイエスなんです。

次に24番目の書『エレミヤ書』に移ります。そこでは、イエスのことは『解放と新しい契約をもたらす私たちの正義なる主』として描かれています。解放というのは、背景にはバビロン捕囚がありますから、バビロン捕囚から解放されるということ。そのバビロン捕囚というのは、私たちを捕囚している罪です。この世の支配者であるサタンからの束縛から、死の力から解放するという、(もともと“福音”という言葉は、“ユーアンゲリオン” euaggelion とギリシャ語で言いますが、その“ユーアンゲリオン”という言葉は、バビロン捕囚から解放されたことを知らせるニュースのことを指した言葉です。ですから、それが本来は良い知らせです。それが転じて、霊的に罪の束縛から解放することを“ユーアンゲリオン”良い知らせ、朗報です。)、良い知らせ。それが“福音” gospel となったわけです。

新しい契約はもちろん言わずと知れた新約のことです。もう古い契約ではありませんから、律法の行いによって私たちは義と認められないことがもうハッキリしているわけです。だから、バビロン捕囚になったわけです。だから、さばかれるわけですが、でも新しい契約はそうではありません。これはイエス・キリストを信じることによって救われるというものです。恵みです。

それをもたらすのは“正義なる主”であると、これはイエスのことを言っています。エレミヤ 23:6『その日、ユダは救われ、イスラエルは安らかに住む。その王の名は、『主は私たちの正義。』と呼ばれよう。』王様の名前は“主は私たちの正義”。ヘブル語では「ヤーウェ・ツドケヌ」といいますが、ヤーウェというのは太字の“主”です。私たちの正義、ツドケヌ。これが名前です。これはキリストの名前の一つと言って良いと思います。ちなみにキリストの名前とか称号というのは、MGFのホームページにも載せてありますので、今私が話している内容も、聖書66巻の中のキリストも、ホームページに全部載っているのです。いろんな箇所を言っていますが、もし聞き漏らしたりしたら、そこを参照すればすぐ分かります。そ

の前だったか、後だったか、定かではないですが、そこにキリストの名前、称号も、今私が知る範囲で載せてありますので、多分 460 個位あったと思います。まだ、どんどん増えていくと思います。それだけ載せているホームページは他にないと思いますので、是非皆さんも目を通して下さい。キリストの名前について知る必要があります。誰かのことを知りたければ、当然名前を知らなければいけません。名前も知らない方をどうやって知ることができるでしょうか。ですから、イエス・キリストを知りたければ、イエスの名前、肩書きを知る必要があります。それは今私が分かっている範囲で 460 以上あります。もっとあると思います。分かったらどんどん加筆していきますし、皆さんも発見したら是非伝えて下さい。そこに無いものがあれば、またお伝えして頂いて、どんどん足していきたいと思います。私を知る限りでは、日本語ではそれほど記しているものもありませんし、英語でもそれほど記しているものもないと思いますので、是非参考にさせて頂きたいと思います。

もう一箇所、エレミヤ 31:31 に新しい契約について書いてある箇所があります。『見よ。その日が来る。——主の御告げ。——その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。』新しい契約を結ぶのは、新約聖書ではイエス・キリストだとハッキリ書いてあります。最後の晩餐の席でも、イエスはハッキリ盃を持って、「これが新しい契約だ。」ともおっしゃいました。

また、イエスが“義なるお方”だと言うことは、正義をもたらすお方です。正義なる主というお方であるということは第 1 コリント 1:30 に出ています。『³⁰しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとなりました。』キリストは私たちにとって“神の義”であると。

また、新しい契約の内容については、ヘブル 8:6 『しかし今、キリストはさらにすぐれた務めを得られました。それは彼が、さらにすぐれた約束に基づいて制定された、さらにすぐれた契約の仲介者であるからです。』

ヘブル 9:15 『こういうわけで、キリストは新しい契約の仲介者です。それは、初めの契約のときの違反を贖うための死が実現したので、召された者たちが永遠の資産の約束を受けることができるためなのです。』

ヘブル 12:24 『さらに、新しい契約の仲介者イエス、それに、アベルの血よりもすぐれたことを語る注ぎかけの血に近づいています。』

次に移っていききたいと思います。25 番目の書で『哀歌』 Lamentations。これはエレミヤによって書かれたものです。そこでも、イエス・キリストは『エルサレムの崩壊を嘆き涙を流す預言者』として描かれています。哀歌 2:11 『私の目は涙でつぶれ、私のはらわたは煮え返り、私の肝は、私の民の娘の傷を見て、地に注ぎ出された。幼子や乳飲み子が都の広場で衰え果てている。』涙の預言者と呼ばれるエレミヤが泣きながら綴った『哀歌』であります。そのエレミヤは正にイエス・キリストの予型・ひな型だったわけです。ですから、“私の目は涙でつぶれ”というのは、イエスの目が正にエルサレムの崩壊を前にして、涙でつぶれているという、号泣しているというところです。事実イエスはエルサレムの崩壊を前にして号泣されたと福音書に書いてあります。ルカ 19:41, 42 です。『⁴¹エルサレムに近くなったころ、都を見られたイエスは、その都のために泣いて、⁴²言われた。「おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら。しかし今は、そのことがおまえの目から隠されている。』イエスは大声で泣かれたと。シクシクじゃなくて、大声で、男なのに大声で公の場で泣いたんです。愛する者が滅びゆく姿を見て、無感情ではいられないわけです。イエス・キリストを信じないで、そのまま滅びゆく、そういう魂をイエスは大声で泣かれる方です。滅びに向かう人たちに対して明確に感情を表して、涙すら流される。それが私たちの神です。救い主です。だから、もうこれ以上罪を犯してはなりません。この方を悲しませることを今

すぐやめなければいけません。

26 番目の書『エゼキエル書』です。それは、イエスとして『まことの牧者にして君主』というふうに描かれています。『まことの牧者（羊飼）にして君主（君主は王とも訳せます。Prince, King）』特にエゼキエル 34 章、これはまことの牧者の姿が出ています。王も出てきます。ダビデという名前が出てきますが、これはキリストのことを指しています。これは牧師として定期的に自戒の章として読んでいるところです。2~4 節に『²「人の子よ。（エゼキエルに対して）イスラエルの牧者たちに向かって預言せよ。預言して、彼ら、牧者たちに言え。神である主はこう仰せられる。ああ。自分を肥やしているイスラエルの牧者たち。牧者は羊を養わなければならないのではないか。³あなたがたは脂肪を食べ、羊の毛を身にまとい、肥えた羊をほふるが、羊を養わない。⁴弱った羊を強めず、病気のものをいやさず、傷ついたものを包まず、迷い出たものを連れ戻さず、失われたものを捜さず、かえって力ずくと暴力で彼らを支配した。』そういうイスラエルの牧者たちに対して、霊的・政治的な指導者たちに対しての非難の言葉が主から浴びせられています。

そして 11~16 節に『¹¹まことに、神である主はこう仰せられる。見よ。わたしは自分でわたしの羊を捜し出し、これの世話をする。¹²牧者が昼間、散らされていた自分の羊の中において、その群れの世話をするように、わたしはわたしの羊を、雲と暗やみの日に散らされたすべての所から救い出して、世話をする。¹³わたしは国々の民の中から彼らを連れ出し、国々から彼らを集め、彼らを彼らの地に連れて行き、イスラエルの山々や谷川のほとり、またその国のうちの人の住むすべての所で彼らを養う。¹⁴わたしは良い牧場で彼らを養い、イスラエルの高い山々が彼らのおりとなる。彼らはその良いおりに伏し、イスラエルの山々の肥えた牧場で草をはむ。¹⁵わたしがわたしの羊を飼い、わたしが彼らをいこわせる。——神である主の御告げ。——¹⁶わたしは失われたものを捜し、迷い出たものを連れ戻し、傷ついたものを包み、病気のものをかづける。わたしは、肥えたものと強いものを滅ぼす。わたしは正しいさばきをもって彼らを養う。』

イエス・キリストは良い牧者としてヨハネの福音書 10 章のところで、ご自身を羊飼としてなぞらえて、ヤウエ宣言を「わたしはあるものである。」と。「良い牧者です。」と。そこは、エゴ・エイミーの宣言です。或いは「わたしは羊の門です。」これもエゴ・エイミーの宣言です。「わたしはあるというものである。」その後ギリシャ語の語順ですと、「門です。」とか、或いは「良い牧者です。」と。「良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」と、そうイエスはおっしゃっています。また、ヨハネ福音書の最後の 21 章のところでペテロに対して「あなたはわたしを愛するか。」と 3 回問うて、3 回公の場でイエスを否定したあのペテロに対して、3 回「わたしを愛するか。」と質問して、そしてペテロに対して「わたしの羊を飼いなさい。わたしの小羊を飼いなさい。羊を養いなさい。」と、3 回お答えになります。そういうペテロがまことの牧者から、イエスの羊を託されて、イエスを愛するがゆえにその羊たちを養うという牧会者としての務め・ミニストリーに導かれていくわけです。私が牧師としてここに置かれているのは、イエスを愛するがゆえであります。それ以外の目的で私が牧会をするならば、きっとどこかで行き詰まりますし、きっとどこかで皆さんを食物にすることを始めると思います。どんどん働けど。どんどん献金しろと。もう身ぐるみ剥がして、羊の毛を刈りまくって。でも、私はイエスの羊を預かって、そしてイエスを愛するがゆえに、それを責任をもって羊飼いのそれこそ下男のようにして、まことの羊飼にお仕えしているわけです。

次に今度は 27 番目の書『ダニエル書』に移りたいと思います。『ダニエル書』はちょっと難しく聞こえるかもしれませんが、そこでイエス・キリストはエルサレム再建命令の 438 年後に来られるメシヤとして現れ、描かれています。エルサレム再建命令というのは、バビロンによってエルサレムが破壊されたんで

すが、そのエルサレムの再建が命令されます。その命令が出てから 438 年後にイエスがメシヤとして登場するということが預言されております。438 年後のその日というのが AD32 年 4 月 6 日の日曜日と計算出来ます。そのことがダニエル 9 : 25 に書いてあります。『それゆえ、知れ。悟れ。引き揚げてエルサレムを再建せよ、との命令が出てから、油そそがれた者、君主の来るまでが七週。また六十二週の間、その苦しみの時代に再び広場とほりが建て直される。』

イエスはルカ 19 : 42,44 (『⁴² 言われた。「おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら。しかし今は、そのことがおまえの目から隠されている。⁴⁴ そしておまえとその中の子どもたちを地にたたきつけ、おまえの中で、一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されない日が、やって来る。それはおまえが、神の訪れの時を知らなかったからだ。』) のところで、そのところでイエスはダニエル書 9 章のことを意識して、「神の訪れの時だ。」と。「今がその時だ。」とおっしゃっています。その時というのは、イエスが AD32 年 4 月 6 日の日曜日に、雌ロバの背に乗ってエルサレムに入城されて、公にユダヤ人の王として礼拝を受けた、その日です。ダニエルが預言していたその日に「あなたがたは神の訪れの時を知らなかった。」と、「ちゃんと預言を学んでいなかった。」ということ指摘されます。

詩篇 118 : 24 には『これは、主が設けられた日である。この日を楽しみ喜ぼう。』と。よく賛美でも歌われる歌詞の元としている詩篇です。その“この日”というのは、AD32 年 4 月 6 日の日曜日、勝利入城の日です。その日を主が設けられたと。「その日を主が造られた。我らはこの日を喜ぼう。」と。本来喜ばなければいけない日に人々はイエスをその同じ週に「十字架につける。」と言って処刑していくわけです。それをイエスを見て号泣されたわけです。涙を流されたわけです。「この日をちゃんと分かっているならば。」

28 番目『ホセア書』。“愛されない者を愛する夫”。これが、ホセア書のイエスです。愛されない者を愛する夫。不倫妻のイスラエルを愛するのがヤーウエです。売春にまで身を落とすわけですが、でもそんな者でも愛される。ホセアがイエス・キリストの型を演じています。不倫妻を迎えて、何度となくホセアを裏切るんですが、それでも、ホセアは神の命令に従って、彼女を見捨てないで、むしろ贖うことをします。金で買い取ることもします。愛されない者を愛する。ホセア 2 : 23 『わたしは彼をわたしのために地にまき散らし、『愛されない者』を愛し、『わたしの民でない者』を、『あなたはわたしの民』と言う。彼は『あなたは私の神』と言おう。』

これはローマ 9 : 25 (『それは、ホセアの書でも言うておられるとおりです。「わたしは、わが民でない者をわが民と呼び、愛さなかった者を愛する者と呼ぶ。』)、第 1 ペテロ 2 : 10 (『あなたがたは、以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、以前はあわれみを受けない者であったのに、今はあわれみを受けた者です。』) に引用されていますから、新約的なメッセージということ。これこそ正にイエス・キリストを指しています。さっきもエペソ 5 章から開いた通り、イエスは私たちの夫です。花婿です。特に 26, 27 節に書いてありました。(『²⁶ キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、²⁷ ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。』) 私たちこそが、愛されない妻です。何度となく神を裏切って、偶像に走っていくような、淫乱妻です。不埒な尻軽女です。それが私たちです。でも、そんな私たちを見捨てずに、愛し続けて、そして私たちを最後は、しみも、しわも、傷も、そのようなものが何一つない栄光の花嫁に変えて下さるわけです。

29 番目の書『ヨエル書』そこには、“その名を呼ぶ者を皆救うキリスト”が描かれています。救い主です。ヨエル 2 : 31, 32 『³¹ 主の大いなる恐るべき日が来る前に、太陽はやみとなり、月は血に変わる。³²

しかし、主の名を呼ぶ者はみな救われる。主が仰せられたように、シオンの山、エルサレムに、のがれる者があるからだ。その生き残った者のうちに、主が呼ばれる者がいる。』

“主の名を呼ぶ者はみな救われる。”これは使徒 2：17～22 のところでペテロが引用しています。『¹⁷『神は言われる。終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。¹⁸ その日、わたしのしもべにも、はしためにも、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。¹⁹ また、わたしは、上は天に不思議なわざを示し、下は地にしるしを示す。それは、血と火と立ち上る煙である。²⁰ 主の大いなる輝かしい日が来る前に、太陽はやみとなり、月は血に変わる。²¹ しかし、主の名を呼ぶ者は、みな救われる。』²² イスラエルの人たち。このことばを聞いてください。神はナザレ人イエスによって、あなたがたの間で力あるわざと、不思議なわざと、あかしの奇蹟を行なわれました。それらのことによって、神はあなたがたに、この方のあかしをされたのです。これは、あなたがた自身をご承知のことです。』これは新約のメッセージ。正に救いの招きのメッセージそのものです。

そして、ローマ 10：9，13。パウロも引用しています。引用しているのは 13 節の方ですが、繋がりがあるので 9 節もお読みします。『⁹なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。¹³「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。』勿論この“主”というのはいエスだということは、ローマ 10 章から明らかです。オリジナルの転経元のヨエル 2：32 を見ると、『主の名を呼ぶ者はみな救われる。』の“主”は太字の主です。『ヤーウエの名を呼ぶ者はみな救われる。』と。ですから、ローマ 10：13 の“主”もヤーウエです。『ヤーウエの御名を呼び求める者は、だれでも救われる。』ギリシャ語なので、ここは“ヤーウエ”とは勿論なっていません。“クーリオス”というのがギリシャ語です。でも、明らかにこれは、“ヤーウエ”の名前です。それを踏まえると 9 節の『もしあなたの口でイエスを主と告白し』その“主”というのはいエスです。『ヤーウエの御名を呼び求める者は、だれでも救われる。』というので、イエスはヤーウエです。もちろん父なる神も、聖霊なる神も“ヤーウエ”と呼ばれています。エホバの証人の言うことは間違っています。イエスは、ミカエルが受肉したものではありません。イエスはヤーウエです。文語体で表現すれば“エホバ”です。イエスこそがエホバです。イエスは御使いではありません。神です。造られたものじゃなくて、すべてを造ったお方です。創造主ということです。

次に 30 番目の書物として『アモス書』。“イスラエルを回復する主”としてイエスが描かれています。アモス 9：11，12 『¹¹ その日、わたしはダビデの倒れている仮庵を起し、その破れを繕い、その廢墟を復興し、昔の日のようにこれを建て直す。¹² これは彼らが、エドムの残りの者と、わたしの名がつけられたすべての国々を手に入れるためだ。——これをなされる主の御告げ。——』

この箇所が使徒の働き 15：16～18 に引用されています。『¹⁶『この後、わたしは帰って来て、倒れたダビデの幕屋を建て直す。すなわち、廢墟と化した幕屋を建て直し、それを元どおりにする。¹⁷ それは、残った人々、すなわち、わたしの名で呼ばれる異邦人がみな、主を求めるようになるためである。¹⁸ 大昔からこれらのことを知らせておられる主が、こう言われる。』』これも実は新約的なメッセージを表しています。イエス・キリストの姿です。“イスラエルを回復する主”

31 番目は『オバデヤ書』です。“千年王国を治めるキリスト”が描かれています。『オバデヤ書』、これは 1 章しかない書なので、21 節のところに『救う者たちは、エサウの山をさばくために、シオンの山に上り、王権は主のものとなる。』王権は主のものとなる。

新約聖書の黙示録 19：11～16。ちょうど千年王国の王権を担うのは、イエス・キリストであるというこ

とです。『¹¹また、私は開かれた天を見た。見よ。白い馬がいる。それに乗った方は、「忠実また真実。」と呼ばれる方であり、義をもってさばきをし、戦いをされる。¹²その目は燃える炎であり、その頭には多くの王冠があって、ご自身のほかだれも知らない名が書かれていた。¹³その方は血に染まった衣を着ていて、その名は「神のことば」と呼ばれた。¹⁴天にある軍勢はまっ白な、きよい麻布を着て、白い馬に乗って彼につき従った。¹⁵この方の口からは諸国の民を打つために、鋭い剣が出ていた。この方は、鉄の杖をもって彼らを牧される。この方はまた、万物の支配者である神の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる。¹⁶その着物にも、ももにも、「王の王、主の主。」という名が書かれていた。』そこでは、王の王、主の主としてイエスが地上再臨されて、その再臨に伴い、地上に千年間のメシヤ王国が樹立されると。王権は主のものとなるということが書かれております。

勿論私たちもそこでは、イエスと共に共同統治するようになります。黙示録 20:6 にも書いてあります。『この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持っていない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる。』キリストと共に、キリストも支配しますが、私たちも共に支配をするようになります。

32 番目の書『ヨナ書』。“死から三日目によみがえられるキリスト”が描かれています。これはヨナ 1:17『主は大きな魚を備えて、ヨナをのみこませた。ヨナは三日三晩、魚の腹の中にいた。』そのことはイエスがダイレクトに言及しています。

マタイ 12:40『ヨナは三日三晩大魚の腹の中にいましたが、同様に、人の子も三日三晩、地の中にいるからです。』イエスが「メシヤであることのしるしは何か。」と問われたら、たったひとつだけ答えようとして、ヨナのしるしをイエスは挙げられました。それが、三日目によみがえる。死人がよみがえる。二度と死なないものによみがえる。朽ちないものによみがえる。これが、メシヤとしての一番の証拠だとイエスは示されるわけです。

33 番目の書は『ミカ書』。“ベツレヘムで生まれるイスラエルの支配者”それがイエスです。ミカ 5:2~4 は有名なクリスマスの預言の箇所です。(『²ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る。その出ることは、昔から、永遠の昔からの定めである。³それゆえ、産婦が子を産む時まで、彼らはそのままにしておかれる。彼の兄弟のほかの者はイスラエルの子らのもとに帰るようになる。⁴彼は立って、主の力と、彼の神、主の御名の威光によって群れを飼い、彼らは安らかに住まう。今や、彼の威力が地の果てまで及ぶからだ。』) これからクリスマスシーズンに入るので、もうお馴染みの聖句になると思います。それは勿論ナザレのイエスにおいて成就します。

ルカ 2:4『ヨセフもガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。彼は、ダビデの家系であり血筋でもあったので、』イエスはユダヤのベツレヘムで生まれます。赤ちゃんですが、イエスは王です。ですから、東方の博士たちが二・三歳のイエスを拝みに来た時に、「ユダヤ人の王を拝みに参りました。」とヘロデ大王にそう言ったわけです。ベツレヘムで生まれるのが王であると。ユダヤ人の王であるという認識です。

34 番目の書は『ナホム書』“世界のさばき主”としてのキリストです。ナホム 1:2, 3『²主はねたみ、復讐する神。主は復讐し、憤る方。主はその仇に復讐する方。敵に怒りを保つ方。³主は怒るのにおそく、力強い。主は決して罰せずにおくことはしない方。主の道はつむじ風とあらしの中にある。雲はその足でかき立てられる砂ほこり。』必ず罰せられる方ということですが、特に『ナホム書』というのは当時オリエ

ントを支配していた世界最強のアッシリア帝国をもさばくと言っているんです。今で言えば、超大国のアメリカをさばくみたいなことを言っているわけです。ですから、それは世界をさばくということ言っているんです。そういうスケールの大きいさばき主。実際にイエスはそういう方だとヨハネ 5 : 22, 27 にご自身そう言われています。『²²また、父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子にゆだねられました。²⁷また、父はさばきを行なう権を子に与えられました。子は人の子だからです。』父なる神からさばきの全権をゆだねられている、さばき主。

世界のさばき主としては、使徒 17 : 31 にもそうあります。『なぜなら、神は、お立てになったひとりの人により義をもってこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。そして、その方を死者の中からよみがえらせることによって、このことの実証をすべての人にお与えになったのです。』

35 番目は『ハバクク書』です。『ハバクク書』は“神の民を救うキリスト”。ハバクク 3 : 13『あなたは、ご自分の民を救うために出て来られ、あなたに油そそがれた者を救うために出て来られます。あなたは、悪者の家の頭を粉々に砕き、足もとから首まで裸にされます。セラ』

これもクリスマスにおいて、マタイ 1 : 21 にこうあります。『マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。』イエスという名前は、“ヤーウエは救い”という意味です。正に救う方です。

同じくマタイ 15 : 24 には『しかし、イエスは答えて、「わたしは、イスラエルの家の滅びた羊以外のところには遣わされていません。」と言われた。』まずイエスはイスラエルの家の失われた羊、滅びた羊とも言います。このイスラエルの民を救うためにまず来られたわけです。でも、残念ながらその民は自分たちのメシヤを拒否して、そしてその良い知らせは、救いの恵みは、非ユダヤ人つまり異邦人の私たちに拡大されていったわけです。でも、まずはイエスは神の民を救うキリストとして来られたわけです。

これは使徒 13 : 23 にも言われていることです。『神は、このダビデの子孫から、約束に従って、イスラエルに救い主イエスをお送りになりました。』

36 番目の書は『ゼパニヤ書』です。“神の民のただ中におられる主”としてイエスが描かれています。ゼパニヤ 3 : 17『あなたの神、主は、あなたのただ中におられる。救いの勇士だ。主は喜びをもってあなたのことを楽しみ、その愛によって安らぎを与える。主は高らかに歌ってあなたのことを喜ばれる。』この“あなた”に、あなたの名前を入れて読んでみて下さい。非常に感動的な聖句です。主はあなたのただ中におられます。主はあなたの救いの勇士です。あなたのことを喜んでいるんです。楽しんでいるんです。その愛によってあなたに安らぎを与えます。私たちもこの方のことを高らかに歌うんですが、主もあなたのことを高らかに歌う。あなたのことを主はほめたたえるわけです。『雅歌』においては、熱烈に花嫁が美しいということを、何度となく連呼しています。愛しいものだと言って、私たちのことを絶賛しているような、美しい詩が『雅歌』にあります。

“ただ中にいる”ということについては、マタイ 18 : 20『ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。』イエスの名によって集まる場所。そこに、そのただ中にイエスがおられる。“ふたりでも三人でも”ですから、ここには間違いなくイエスがおられます。

また、エペソ 3 : 17。『こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。また、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、』これは祈りですけれども、イエスが私たちの内に住んで下さるように。

また、コロサイ 1 : 27『神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間であってどのように栄光に富んだものであるかを、知らせたいと思われたのです。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の

望みのことです。』あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望み。栄光の希望。これが内住のキリストだと。ですから、私たちは決して希望を失うことはないということです。どんな希望よりも輝いているのは、この栄光の希望、ただ中におられる主、内住のキリストです。ですから、クリスチャンは絶対に希望を失うことはありません。最高の希望を頂いております。

次に 37 番目『ハガイ書』です。そこでは“第二神殿に現れるキリスト”です。第二神殿とは、第一神殿がソロモンの神殿。第二神殿がゼルバベルの神殿。バビロンによって破壊された後、ゼルバベル総督がクロス王によって派遣されて、そして神殿を再建するわけです。その神殿が、ヘロデ大王によって大改築されるんですが、その第二神殿にイエスが現れるわけです。第二神殿にあらわれるのが約束のメシヤだという内容。それがハガイ 2:6~9 『⁶まことに、万軍の主はこう仰せられる。しばらくして、もう一度、わたしは天と地と、海と陸とを揺り動かす。⁷わたしは、すべての国々を揺り動かす。すべての国々の宝物がもたらされ、わたしはこの宮を栄光で満たす。(この宮というのが第二神殿です。再建されたゼルバベルの神殿。) 万軍の主は仰せられる。⁸銀はわたしのもの。金もわたしのもの。——万軍の主の御告げ。——(銀行口座のものはあなたのものじゃないです。全部主のもので、マイナンバー制度でこれを行政に知られたらとか、隠し財産がとか、そんなことは心配しないで下さい。主は全部知っていますので、銀行に預けていようと預けていまいと、どこに隠していようと、全部主のものであると。)⁹この宮のこれから後の栄光は、先のものよりまさろう。(先のものというのは、ソロモンの第一神殿よりも優る栄光が、この第二神殿には与えられる。) 万軍の主は仰せられる。わたしはまた、この所に平和を与える。——万軍の主の御告げ。——』平和というのが、究極の平和、イエス・キリストのことなんですが、ソロモンの神殿に比べたらゼルバベル神殿、第二神殿はみすばらしい小規模のものだったんです。にもかかわらず、そこにメシヤがやってくるので、前のソロモンの神殿よりも、先の神殿よりも、もっと素晴らしい栄光が満ちると。当然といえば当然です。イエスがそこに来られるわけですから。

そのことについては勿論新約聖書で確認できます。ルカ 2:49 (『するとイエスは両親に言われた。「どうしてわたしをお捜しになったのですか。わたしが必ず自分の父の家にいることを、ご存じなかったのですか。」』) では 12 歳の、もちろん赤ちゃんの時から、母マリヤの胎の中にいる時から、神殿には出入りしていたわけですが、12 歳の時もイエスはエルサレムの神殿に行きました。

また十字架刑につけられる前も、毎日宮で教えておられました。マタイ 26:55 『そのとき、イエスは群衆に言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってわたしをつかまえに来たのですか。わたしは毎日、宮ですわって教えていたのに、あなたがたは、わたしを捕えなかったのです。』

ヨハネ 18:20 『イエスは彼に答えられた。「わたしは世に向かって公然と話しました。わたしはユダヤ人がみな集まって来る会堂や宮で、いつも教えたのです。隠れて話したことは何もありません。』そこはイエスの父の家でもあります。“わたしの父の家”とも呼ばれています。そこにイエスは出入りされたわけです。だから、栄光に満ちたわけです。

38 番目の書『ゼカリヤ書』。それは“ろばに乗られる王で十字架上で槍で突き刺されるキリスト”を描いています。ろば、雌ろばの子に乗って来られる王ですが、十字架上で槍に突き刺されるキリスト。ゼカリヤ 9:9 にまずろばに乗って来られるということが書いてあります。『シオンの娘よ。大いに喜べ。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方は正しい方で、救いを賜わり、柔和で、ろばに乗られる。それも、雌ろばの子の子ろばに。』

ゼカリヤ 12:10 (『わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を

失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く。』)では、突き刺された方と。王が処刑されるというのは、矛盾して聞こえるかもしれませんが、でもそれが苦難のしもべです。王ですから、当然本来であれば軍馬にまたがってご自分の都に勝利入城されるはずなんですが、雌ろばの、子ろばに乗って、そして柔和な方、へりくだった方として入城されて、そして最後は磔はりつけにされて死なれるわけです。罪状書きには『ユダヤ人の王、ナザレのイエス』と書かれるわけです。

それについてはヨハネ 12:15 (『「恐れるな。シオンの娘。見よ。あなたの王が来られる。ろばの子に乗って。』)ではゼカリヤ 9:9 の成就が描かれています。

槍に突き刺されることについては、ヨハネ 19:34 (『しかし、兵士のうちのひとりがイエスのわき腹を槍で突き刺した。すると、ただちに血と水が出て来た。』)脇腹から血と水が分かれ出て、そこから生まれたのは私たち教会です。最後のアダムであるイエス・キリストの脇腹から血と水が出た。それは、赤ちゃんが産まれる出産のシーンを重ねて見ることが出来ます。アダムの脇腹から花嫁のエバが生まれたように、最後のアダムであるイエスの脇腹から血と水が分かれ出て、そこから花嫁の教会が、私たちエバが生まれたわけです。

また黙示録 1:7 のところにも突き刺された方としてイエスが描かれています。『見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。』

旧約最後の 39 番目の書『マラキ書』です。そこでは“使者 (バプテスマのヨハネ) に続いて現われる義の太陽”としてイエスが描かれています。“義の太陽”。マラキ 3:1 をお読みします。『「見よ。わたしは、わたしの使者を遣わす。(メッセンジャー、これはバプテスマのヨハネです。) 彼はわたしの前に道を整える。あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。(イエスが神殿に来るわけです。) あなたがたが望んでいる契約の使者が、見よ、来ている。』と万軍の主は仰せられる。』

そして、マラキ 4:2 『しかし、わたしの名を恐れるあなたがたには、義の太陽が上り、その翼には、いやしがある。あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のようにね回る。』“義の太陽”、沈まぬ太陽として、イエスが来られます。

この描写はルカ 1:78, 79 にも描かれています。『⁷⁸これはわれらの神の深いあわれみによる。そのあわれみにより、日の出がいと高き所からわれらを訪れ、⁷⁹ 暗黒と死の陰にすわる者たちを照らし、われらの足を平和の道に導く。』

そしてイエスが文字通り神の都では太陽となって下さることは、黙示録 21:23 に記録されています。『都には、これを照らす太陽も月もない。(新しいエルサレムには太陽はいらない。) というのは、神の栄光が都を照らし、小羊が都のあかりだからである。』

これで旧約聖書 39 巻をカバーしたわけですが、新約聖書が 27 巻あります。旧約聖書はイエスの姿が隠れていたの、ある程度そのベールを剥がすというか、隠れたものを明かすような、そういう説明が必要なので時間をかけましたけれども、新約は影ではなく、本体であるイエス・キリストを直接描いていますので、これについてはそんなに説明はいらないと思うので、さらっと受肉後のキリストとして新約聖書の中から簡単に見ていきたいと思えます。次回第 3 回目ということで、66 巻のキリスト新約編を次回はお届けしたいと思えます。